

大学生の職業観・就職観における私事化傾向 — 日中 2 大学の比較を通して —

施 秀平 * 櫃本 尚岐 * 磯田 朋子 † 香月 保彦 †

Privatization in Students' View of Occupation
— Through Comparison between Japanese and Chinese Students —

Shi Xiu Ping *, Naoki Hitsumoto *, Tomoko Isoda †, Yasuhiko Katsuki †

要約

日本においても中国においても多くの大卒者が、深刻な就職難に直面している。こうした状況下で、若者はどのような職業観・就職観をもっているのか、H 大学と W 大学、日中の 2 大学において調査を実施した。また、W 大学が温州市にあることから、温州モデルの特徴の一つとして注目される、温州人のパーソナリティ（温州人気質）についても分析した。

分析結果から見ると、日中双方とも、言われるほどに学生は私事化していないと言える。しかし、中国人学生との比較においては、日本人学生の職業観・就職観の特徴として、一つには私事化傾向が指摘できる。それ以外には、終身雇用、年功序列といった雇用形態や、安定を志向する文化の影響が見られた。

温州人気質については、本調査の対象者においては認められなかった。他のグループと比較して、温州人（もしくは温州人を含む浙江省の学生）の特徴として挙げられたのは、唯一、他に比べて現実的であるという点のみである。また、男性においてのみ、温州人学生は、他のグループより家庭志向が強いということがわかった。これについては、幾つかの解釈が可能であるが、家族経営の多い経営形態の影響という意味で、温州的な背景を指摘できよう。

キーワード：職業観・就職観、日中比較、私事化、温州人気質

I はじめに

1990 年代、バブルの崩壊後の就職難は氷河期と称されたが、現在の学生に対する求人はそれ以下で、彼らは厳しい就職難に直面している。不況による就職難は、中国もまた同様である。中国では、大学進学者数が急速に増加した^{*1} 影響もあり、多くの大卒者が就職難に見舞われた。

* 広島文化学園大学大学院 社会情報学研究科

† 広島文化学園大学 社会情報学部

^{*1} 1988 年の進学者数は 67.0 万人、10 年後の 1998 年の進学者数は 108.4 万人、さらに 10 年後の 2008 年の進学者数は 607.7 万人に至った。進学者数は、1988 年から 1998 年の 10 年間で 1.6 倍に、1998 年から 2008 年の 10 年間で 5.6 倍に増加している¹⁾。

こうした現象に対して、若者がなかなか就職しないことの原因を、社会の側でなく彼らの態度、主としてその私事化傾向に求める論調も、日中双方において見られた。日本ではニート・フリーター問題として話題になり²⁾、中国では「啃老族」という言葉が生まれた。本来この言葉は、親の脛をかじる人たちという意味であるが、一人っ子政策のもと、親や祖父母に甘やかされて育ち、いつまでも就職しない若者、特に「80 以后」（'80 年以降生まれ）の若者を指す。

こうした状況下で、彼らはどのような職業観・就職観をもって就職活動に向かうのだろうか、日本の H 大学と、中国の W 大学において調査を実施し、彼らの職業観・就職観を見てみる。

H 大学は広島県にあり、W 大学は中国浙江省東南部の温州市にある。温州市は常住人口約 790.1 万人³⁾、靴類、衣類、めがね等の輸出により大きく発展した都市である。その発展ぶりは、温州モデルとして、国の内外から注目を集めた^{4), 5)}。1978 年 12 月以降、改革開放政策を進める中国の一つのモデルケースでもある。

温州モデルの特徴の一つに、その人的ネットワークの在り方や、温州人のパーソナリティ（温州人氣質）が挙げられる。ヨーロッパを中心に広く世界で活躍する彼らは、大きく開かれた面をもつ一方で、近隣や親族といった関係を重視する。この点に着目し、そのスモールネットワークの特徴を見る分析もなされている⁶⁾。

本調査では、中国人学生を比較群としながら、日本人学生の職業観・就職観を見ていくとともに、中国人学生の中で、温州人学生の職業観・就職観に温州人氣質なるものが見られるのか、見られるとすれば、その特徴はどのようなものか、を中心に分析する。

II 分析枠組み

本研究では、大学生の職業観・就職観を見る上で、私事化傾向に着目する。'80 年代以降、様々な領域でその変化に私事化という共通項が発見され、現代社会の趨勢を語るキーワードとなっている^{*2}。私事化は多方面にわたり、また様々な形で現れているが、筆者らは、それらを 1) 規範非拘束性、2) 情緒志向、3) 公的世界への関心の撤退、4) 短期的・直接的利益追求、5) 適応 に整理している⁸⁾。

本研究では、これらの概念を中心に私事化項目の指標化を行い、その軸上で日中比較を試みようとするものである。具体的には、対象者を出身によってグループ分けし、そのグループ変数と、職業観・就職観およびその関連項目としての私事化項目とのクロス集計を行う。

^{*2} 私事化は個別化・個人化等の類似の概念とともに提示された⁷⁾。我々は、個人化と個別化、個別化と私事化を使い分けることを提案してきたが、しばしば同義の置き換え可能な用語として用いられる。

III 調査概要

1 調査概要

本調査は、日本側は広島にある H 大学、中国側は温州市にある W 大学で実施した。H 大学社会情報学部 に在籍する全学生（516 名）および W 大学商学院の学生（1589 名）を母集団とするが、学生数の関係から H 大学は悉皆調査とし、W 大学は学生名簿から単純無作為抽出で 550 名の学生を抽出した。調査方法は、自計式質問紙法、配布・回収は手渡しによる。日本語で調査票を作成した後、中国語への翻訳を行い、H 大学の中国人留学生と W 大学の学生には中国語版を配布した。調査の実施期間は 2009 年 11 月 16 日から 12 月 4 日、回収数（率）は、H 大学では 283（54.7 %）、W 大学では 542（98.5 %）、全体では 825（77.3 %）であった*3。その上で、H 大学は得られたデータから無作為抽出を行い、176 ケースを抽出して、H 大学と W 大学のサンプル数がそれぞれ母集団のサイズに比例するように調整を行った。

2 分析方法

本調査で得られたデータは、まず、それぞれの出身地により、H 大学の学生を「日本人学生」、「留学生」に分け、ついで、W 大学の学生を「温州人学生」、「その他浙江省学生（以下、浙江省学生と表記する）」、「浙江省外学生」の 3 グループに分け、計 5 つのグループを得る。H1 は「日本人学生」、H2 は「留学生」、W1 は「温州人学生」、W2 は「浙江省学生」、W3 は「浙江省外学生」を示す。本論文では、主としてこのグループ間の比較を中心に分析を行う。また、多くの質問項目は、順位尺度を想定して作成されており、それぞれ、x1 から x4 までの 4 つの選択肢が用意されている。

分析には、主としてクロス集計およびカイ二乗検定を用いたが、視覚的にその関係を示すため数量化を行い、その階級値をグラフ化して示す。数量化の方法については、巻末の付録 A を参照されたい。

まず、日中差に注目して見る。就職観の関連項目とのクロス表において、日本人と中国人（5 グループのうち、日本人を除く 4 グループの合計）との間で有意差が見られた項目を取り上げるが、中国人同士においても統計的有意差がある項目、および変数の数量化の結果、順位尺度に逆転等が見られた項目はこれを除き、残った項目を日本人学生（あるいは中国人学生）の特徴を示す項目として取り上げることにする。

次に、温州人気質に注目する分析においては、5 グループから日本人を除いて、中国人のみのデータセットを作成して分析を進める。温州人（もしくは温州人を含む浙江省の学生）とその他の学生との間に、有意差がある項目を取り上げる。ここでも、原則として変数の数量化の結果、順位尺度に逆転等が見られた項目は除く。

*3 W 大学では寮に訪問して配布した。学生は基本的に寮生活であるため、高い回収率を得た。

IV 分析結果

1 日本人学生の職業観・就職観

A 私事化項目

1) 個人の権利志向

まず、「グループ」と「個人の権利のためには、公共の利益が多少損なわれても、仕方がない」のクロス集計と数量化を行った。クロス表を表1に示す。行に「日本人学生」から「浙江省外学生」の5グループと数量化した階級値を示す。同様に個人の権利志向の項目選択肢は「そう思う」から「そう思わない」の順にあり、その下の数値が数量化した階級値である（以下同様）。なお、調査票にはこの項目について4つの選択肢があるが、「そう思う」と答えた人数は極めて少なく、ここでは「どちらかと言えばそう思う」と合わせて「そう思う・どちらかと言えばそう思う」として分析した。

表1 「個人の権利のためには、公共の利益が多少損なわれても、仕方がない」

	そう思う・ どちらかと言えば そう思う x1 -1.99	どちらかと言えば そう思わない x2 0.02	そう思わない x3 0.85	合計
日本人学生 H1 -2.49	44 47.8%	36 39.1%	12 13.0%	92 100.0%
留学生 H2 0.67	9 11.4%	29 36.7%	41 51.9%	79 100.0%
温州人学生 W1 -0.08	18 18.9%	39 41.1%	38 40.0%	95 100.0%
浙江省学生 W2 0.32	46 12.9%	163 45.7%	148 41.5%	357 100.0%
浙江省外学生 W3 0.88	8 9.9%	27 33.3%	46 56.8%	81 100.0%
合計	125 17.8%	294 41.8%	285 40.5%	704 100.0%

Sig.=0.000* Chi-square=84.7176

注) *は0.001未満

留学生以下、中国人学生では「そう思う・どちらかと言えばそう思う」と答える学生は1割から2割程と少なく、多くの学生は、公共の利益を優先する姿勢を示す。日本人学生においても、肯定と否定（以下は「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」と合わせて肯定的反応とし、同じく、「そう思わない」と「どちらかと言えばそう思わない」と合わせて、否定的反応とする）はほぼ半々である。ここに見る限り、彼らは言われるほどには私事化していない。しかし、中国人と比べるなら、日本人学生は、「そう思う・どちらかと言えばそう思う」と答える比率は5割近くあり、相対的に、「個人の権利のためには、公共の利益が多少損なわれても、仕方がない」と答える割合が高い。

これを数量化して、階級値を直線上にプロットすると、図1のようになる。ここではH1は「日本人学生」、H2は「留学生」、W1は「温州人学生」、W2は「浙江省学生」、W3は「浙江省外学生」を示す、私事化項目の選択肢は、「そう思う・どちらかと言えばそう思う」をx1に、「どちらかと言えばそう思わない」をx2に、「そう思わない」をx3に示した。

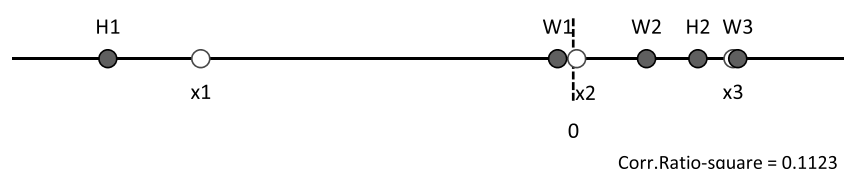


図1 「個人の権利のためには、公共の利益が多少損なわれても、仕方ない」

図1と表1から見ると、グループの階級値では、H1「日本人学生」だけが大きく左に離れていることがわかる。またH1「日本人学生」の階級値は-2.49、x1「そう思う・どちらかと言えばそう思う」の階級値は-1.99で、H1「日本人学生」の階級値とx1「そう思う・どちらかと言えばそう思う」の階級値はともに大きく左に寄っている。x1「そう思う・どちらかと言えばそう思う」という回答がH1「日本人学生」の特徴を示していることがわかる。一方、中国人学生はH2からW3の階級値は、それぞれ0.67、-0.08、0.32、0.88であり、中国人4グループにおける階級値の差は小さい。また、x2「どちらかと言えばそう思わない」の階級値は0.02、x3「そう思わない」の階級値は0.85であり、x1との距離に比べるとこの2つの回答は近く、日本人学生と中国人学生の違いを示す項目であることがわかる。以上のことから、日本人学生は相対的に個人の権利志向が強いと見なすことができよう。

2) 今志向

次に「将来のために節約や努力をするよりも今、人生を楽しむべきだ」という項目について見ていく。クロス表は表2のとおりである。この項目は、男性においてのみ、日本人学生と中国人学生との間に有意差が見られた。

表2から見ると、日本人学生では肯定的反応が6割程度、中国人学生においては4割前後で、肯定的反応と否定的反応は、拮抗している。しかし、両者を比較すれば、日本人学生においては「将来のために節約や努力をするよりも今、人生を楽しむべきだ」とは思っている学生の比率が高く、中国人学生より今志向が高いと言える。これを数量化して階級値を直線上にプロットすると、図2のようになる。

図2と表2から見ると、グループの階級値では、H1「日本人学生」だけが大きく左に離れていることがわかる。x1「そう思う」とx2「どちらかと言えばそう思う」の階級値は-0.86と-0.92であり、H1「日本人学生」の特徴は、x1「そう思う」とx2「どちらかと言えばそう思う」にあることがわかる。なお、x1「そう思う」とx2「どちらかと言えばそう思う」は僅かながら逆転を示しているが、ごく僅かの差であって、ほぼ同一の値と見なすことができよう。こうして見ると、日本

表2 「将来のために節約や努力をするよりも今、人生を楽しむべきだ」（男性）

		そう思う x1 -0.86	どちらかと言えば そう思う x2 -0.92	どちらかと言えば そう思わない x3 0.16	そう思わない x4 1.73	合計
日本人学生	H1 -1.62	17 26.2%	23 35.4%	18 27.7%	7 10.8%	65 100%
留学生	H2 0.11	9 23.1%	8 20.5%	14 35.9%	8 20.5%	39 100%
温州人学生	W1 0.95	7 21.9%	7 21.9%	8 25.0%	10 31.3%	32 100%
浙江省学生	W2 0.15	13 11.6%	33 29.5%	44 39.3%	22 19.6%	112 100%
浙江省外学生	W3 1.51	6 16.7%	7 19.4%	11 30.6%	12 33.3%	36 100%
合計		52 18.3%	78 27.5%	95 33.5%	59 20.8%	284 100%

Sig.=0.077 Chi-square=19.4860

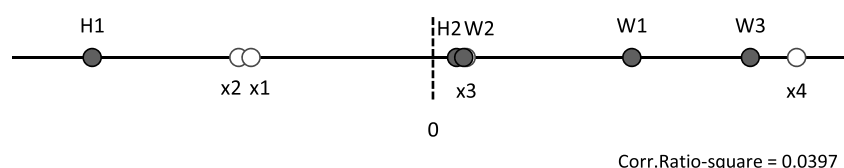


図2 「将来のために節約や努力をするよりも今、人生を楽しむべきだ」（男性）

人学生は、将来のことより今を楽しむべきだと考える「今志向」が強いことがわかる。中国人学生は、x3「どちらかと言えばそう思わない」とx4「そう思わない」と答えるものの方が多く、日本人に比べると将来に備える志向が強い。

「個人の権利のためには、公共の利益が多少損なわれても、仕方がない」の項目においては、中国人学生との比較して、日本人学生に個人の権利を重視するという私事化傾向が認められた。また、男性のみを見れば、「将来のために節約や努力をするよりも今、人生を楽しむべきだ」においても、日本人学生は将来のことより、今を楽しむべきだと思っている点で、中国人学生より私事化していることがわかる。

有意差のある項目は多くなかったが、以上の2点からは、日本人学生の私事化傾向を指摘できよう。

B その他の項目

3) 成果主義

次に「給与体系は年功序列より成果主義にするべきだ」という項目について見ていく。クロス表は表3のとおりである。この項目についても4つの選択肢があるが、「そう思わない」と答えた人数は極めて少なく、ここでは「どちらかと言えばそう思わない」と合わせて「そう思わない・どちらかと言えばそう思わない」として分析した。

表3 「給与体系は年功序列より成果主義にするべきだ」

	そう思う x1 -0.76	どちらかと言えば そう思う x2 -0.10	そう思わない・ どちらかと言えば そう思わない x3 2.37	合計
日本人学生 H1 2.48	16 16.8%	40 42.1%	39 41.1%	95 100.0%
留学生 H2 -0.82	43 53.8%	31 38.8%	6 7.5%	80 100.0%
温州人学生 W1 -0.00	31 32.3%	53 55.2%	12 12.5%	96 100.0%
浙江省学生 W2 -0.32	139 38.4%	187 51.7%	36 9.9%	362 100.0%
浙江省外学生 W3 -0.68	38 46.9%	37 45.7%	6 7.4%	81 100.0%
合計	267 37.4%	348 48.7%	99 13.9%	714 100.0%

Sig.=0.000* Chi-square=82.8494

注) *は0.001未満

どのグループでも、過半数が成果主義を肯定する。「そう思わない・どちらかと言えばそう思わない」と答える学生は少なく、中国人学生では、1割前後である。多くの学生は、「給与体系は年功序列より成果主義にするべきだ」と思っており、成果主義を志向していることを示している。日本人学生においても、6割程度が肯定的な反応を示しており、彼らもまた成果主義を志向していると言える。しかし、「そう思う」と明快に成果主義を肯定する回答は、中国人学生では比較的少ない温州人学生でも32%、留学生では53%と過半数に上るのに対して、日本人学生では「そう思う」は16%と低く、反対に「そう思わない」の割合が他のグループに比して高い。これを数量化して階級値を直線上にプロットすると、図3のようになる。

図3と表3を見ると、グループの階級値では、H1「日本人学生」だけが大きく右に離れており、x3「そう思わない・どちらかと言えばそう思わない」に近い。これに対し、x1「そう思う」とx2「どちらかと言えばそう思う」の階級値は、それぞれ-0.76と-0.10と差が小さく、中国人グループの階級値と考え合わせると、この2つの回答が中国人4グループに共通の特徴であることがわかる。全体に成果主義が肯定される中で、日本人学生は中国人学生に比べると、成果主義に慎重であ

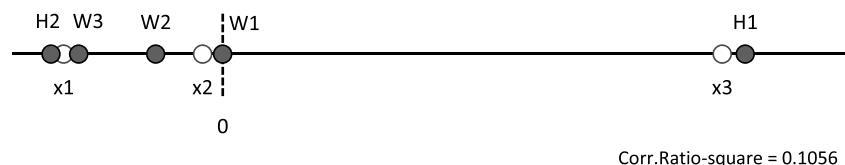


図3 「給与体系は年功序列より成果主義にするべき」

る。日本では、終身雇用、年功序列という雇用形態が主流であったため、それを内面化している学生が慎重な態度を示したことが考えられる。また、昨今では「格差社会」が話題になる中で、行き過ぎた成果主義が一部の労働者の切捨てに繋がっているということが指摘されるなど、成果主義への反省も見られており、その影響もあるものと思われる。

4) 転職志向

次に、「よりよい条件を求めて転職するのは当然だ」という項目とクロス集計と数量化を行った。クロス表は表4のとおりである。この項目についても、「そう思わない」と「どちらかと言えばそう思わない」を合わせて「そう思わない・どちらかと言えばそう思わない」として分析した。

表4 「よりよい条件を求めて転職するのは当然だ」

	そう思う x1 -0.71	どちらかと言えば そう思う x2 -0.34	そう思わない・ どちらかと言えば そう思わない x3 1.98	合計
日本人学生 H1 2.51	17 17.9%	36 37.9%	42 44.2%	95 100.0%
留学生 H2 -0.48	33 41.3%	34 42.5%	13 16.3%	80 100.0%
温州人学生 W1 -0.03	32 33.3%	45 46.9%	19 19.8%	96 100.0%
浙江省学生 W2 -0.52	122 33.7%	187 51.7%	53 14.6%	362 100.0%
浙江省外学生 W3 -0.11	25 30.9%	41 50.6%	15 18.5%	81 100.0%
合計	229 32.1%	343 48.0%	142 19.9%	714 100.0%

Sig.=0.000* Chi-square=45.9898

注) *は0.001未満

表4から見ると、中国入学生のグループではいずれも8割が「そう思う」または「どちらかと言えばそう思う」と答えている。多くの学生は「よりよい条件を求めて転職するのは当然だ」と思っていることがわかる。日本人学生においても「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」を合わせると半数を超えるが、「そう思わない・どちらかと言えばそう思わない」と答えた比率も4割強

あり、肯定的反応と否定的な反応はほぼ半々で拮抗している。中国人学生のグループと比較するならば、相対的には、否定的反応が強いと言えよう。これを数量化して階級値を直線上にプロットすると、図4のようになる。

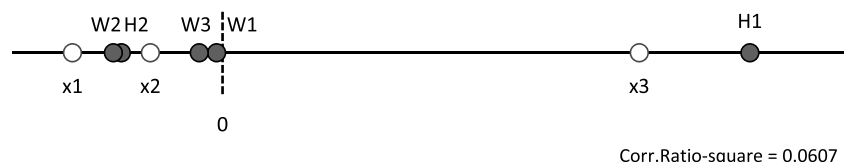


図4 「よりよい条件を求めて転職するのは当然だ」

図4と表4から見ると、H1「日本人学生」が一番右にあり、中国人学生グループから離れていることがわかる。H1「日本人学生」の階級値は 2.51 で、x3「そう思わない・どちらかと言えばそう思わない」の階級値は 1.98 で、H1「日本人学生」に特徴的な回答が、x3「そう思わない・どちらかと言えばそう思わない」であることを示している。日本人学生は「よりよい条件を求めて転職するのは当然だ」とする意見に否定的な傾向がある。成果主義と同様に、ここには伝統的な日本の就労習慣の影響を見てとることができる。また、中国人学生は「よりよい条件を求めて転職するのは当然だ」考えており、転職志向および転職を通じてよりよい条件を追求する姿勢を示す。

5) リーダー志向

この他、日本人学生と中国人学生との比較において、有意差があった項目を見てみる。「自分はリーダーよりも、サポート役の方が向いている」という項目において、中国人学生と、日本人学生の間には有意な差が見られた。

表5から見ると、中国人学生では肯定的な反応と否定的な反応はほぼ半々であるが、日本人学生において、「そう思う」または「どちらかと言えばそう思う」と答えた学生は8割近くに上る。日本人学生は「自分はリーダーよりも、サポート役の方が向いている」と思っており、そのことは、リーダーよりもサポート役を志向する就職観に繋がっている。この項目は、「責任のあるポジションには就きたくない」「大きな会社の一社員になるより小さな会社のリーダーになりたい」などの項目と強い相関を示している。中国人学生の中では、浙江省学生に「どちらかと言えば当てはまる」と答えた学生が41%あって比較的高いが、他のグループはいずれ過半数の学生が否定しており、自分がサポート役に向いているとは思っていないことがわかる。これを数量化して階級値を直線上にプロットすると、図5のようになる。

図5と表5から見ると、グループの階級値では、中国人4グループと比べ、H1「日本人学生」だけが左に大きく離れている。H1「日本人学生」の階級値は -2.48 にあり、x1「当てはまる」と x2「どちらかと言えば当てはまる」の階級値は、それぞれ -1.58 と -0.52 である。このことから、日本人学生は「自分はリーダーよりも、サポート役の方が向いている」と考えていることがわかる。それに対して、中国人学生はいずれのグループの階級値も、x3「どちらかと言えば当てはまらな

表5 「自分はリーダーよりも、サポート役の方が向いている」

		当てはまる x1 -1.58	どちらかと言えば 当てはまる x2 -0.52	どちらかと言えば 当てはまらない x3 0.92	当てはまらない x4 1.28	合計
日本人学生 H1 -2.48		28 31.1%	43 47.8%	14 15.6%	5 5.6%	90 100%
留学生 H2 0.76		13 16.5%	23 29.1%	28 35.4%	15 19.0%	79 100%
温州人学生 W1 0.84		10 10.5%	35 36.8%	37 38.9%	13 13.7%	95 100%
浙江省学生 W2 0.07		51 14.1%	151 41.8%	110 30.5%	49 13.6%	361 100%
浙江省外学生 W3 0.70		13 16.0%	26 32.1%	22 27.2%	20 24.7%	81 100%
合計		115 16.3%	278 39.4%	211 29.9%	102 14.4%	706 100%

Sig.=0.000* Chi-square=42.6548

注) *は0.001未満

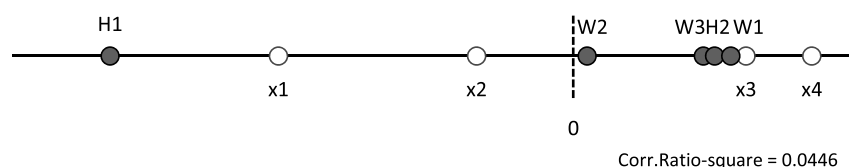


図5 「自分はリーダーよりも、サポート役の方が向いている」

い」、x4「当てはまらない」よりになり、リーダーに向いていると考えていることがわかる。

「給与体系は年功序列より成果主義にするべきだ」「よりよい条件を求めて転職するのは当然だ」「自分はリーダーよりも、サポート役の方が向いている」などは、日本の伝統的な就労習慣と関連する項目である。これまで、日本では就職とは即ち就社であり、かつその組織においては、終身雇用、年功序列であった。組織の一員として、寄らば大樹の陰を旨として生きる職業観・就職観であり、自らがリスクを背負って会社を興すという職業観・就職観とは対極の態度である。日本の雇用、就労習慣も変化してきているが、中国人と比較して見ると、日本人学生が、伝統的な職業観・就職観の影響を受けている点が認められる。

2 温州人気質

温州は他の地域と異なり、政府の力に頼らず自力で経済的發展を実現してきた。いわゆる「温州モデル」である⁹⁾。その成功の要因として、しばしば、商魂の逞しきや商売の巧みさ等、温州人の

特質が挙げられる⁵⁾。では、彼らに特徴的なパーソナリティー（温州人気質）とは如何なるものであろうか。本調査では、温州人気質として、チャレンジ志向、リーダー志向、また、起業志向を挙げ、中国人学生のうちで温州人学生には温州人気質と言われる気質があるのか、あるとすればそれはどのような気質か、について見ていく。

就職観の関連項目とのクロス集計において、中国人学生の中で、温州人（項目によっては、温州人＋浙江省学生）と、その他中国人学生（留学生、浙江省学生、浙江省外学生グループ）との間で有意差があり、変数の数量化により順位尺度に並んでいる項目を、温州人の特徴として取り上げる。

1) 理想志向

「妥協をせず、理想を追求するべきだ」という項目とのクロス集計と数量化を行った。クロス表は表6のとおりである。この項目についても4つの選択肢があるが、「そう思わない」と答えた人数は極めて少なく、ここでは「どちらかと言えばそう思わない」と合わせて「そう思わない・どちらかと言えばそう思わない」として分析した。

表6 「妥協をせず、理想を追求するべきだ」

		そう思う x1 -1.32	どちらかと言えば そう思う x2 0.74	そう思わない・ どちらかと言えば そう思わない x3 0.81	合計
温州人学生	W1 0.67	30 31.3%	49 51.0%	17 17.7%	96 100.0%
浙江省学生	W2 0.50	117 32.6%	177 49.3%	65 18.1%	359 100.0%
浙江省外学生	W3 -2.32	44 55.0%	28 35.0%	8 10.0%	80 100.0%
留学生	H2 -0.77	33 42.9%	29 37.7%	15 19.5%	77 100.0%
合計		224 36.6%	283 46.2%	105 17.2%	612 100.0%

Sig.=0.006 Chi-square=18.0054

表6から見ると、どのグループでも「そう思う」または「どちらかと言えばそう思う」と答える学生は8割強ある。多くの学生は「妥協をせず、理想を追求するべきだ」と思っており、理想主義を示している。特に、浙江省外学生では、明確に「そう思う」と答えた学生は5割強あり、強く理想追求を志向していると言える。これを数量化して階級値を直線上にプロットすると、図6のようになる。

図6と表6から見ると、W1「温州人学生」とW2「浙江省学生」は右にあり、それらの階級値は0.67と0.50と近く、またx2「どちらかと言えばそう思う」とx3「そう思わない・どちらかと言えばそう思わない」の階級値は、それぞれ0.74, 0.81と近い。この2つの回答は、温州人学生の

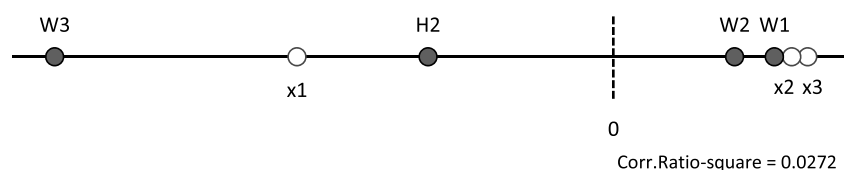


図6 「妥協をせず、理想を追求するべきだ」

特徴と言うより、両者を合わせて、温州人を含む浙江省の学生の特徴として捉えられることがわかるとともに、「そう思う」という明快な反応でなければ、「どちらかと言えばそう思う」と「そう思わない・どちらかと言えばそう思わない」の間にもあまり違いがないことがわかる。こうして見ると、浙江省出身の学生は、他の中国人学生より現実的であると言えよう。また、W1「温州人学生」とW2「浙江省学生」の階級値は近いが、W1「温州人学生」はW2「浙江省学生」よりさらに右にあることから、W1「温州人学生」は浙江省出身の学生中でも現実的であることがわかる。なお、この項目は、日本人の特徴の項目としては要件を満たさなかったため、取り上げなかったが、日本人を入れた5グループでは、日本人学生は温州人学生より「そう思わない」に近く、温州人の学生よりさらに現実的＝私事化していると言える。

男女を合わせたグループ間の比較では、グループ間に有意差があり、かつ順位尺度の逆転が見られない項目は他にはなかった。そこで、男性のみ、女性のための集計を行い、温州人とその他中国人学生との間で有意差があり、変数の数量化の結果が順位尺度に並んでいる項目を見てみる。

2) 個人の権利志向

「個人の権利のためには、公共の利益が多少損なわれても、仕方がない」という項目とクロス集計と数量化を行った。この項目は、男性においてのみ、温州人学生とその他中国人学生との間に有意差が見られた。クロス表は表7のとおりである。この項目についても4つの選択肢があるが、「そう思う」と答えた人数は極めて少なく、ここでは「どちらかと言えばそう思う」と合わせて「そう思う・どちらかと言えばそう思う」として分析した。

表7から見ると、どのグループにおいても「そう思う・どちらかと言えばそう思う」に答える学生は少ない。「個人の権利のためには、公共の利益が多少損なわれても、仕方がない」とは思っておらず、公共の利益を重視する姿勢を示している。しかし、温州人は、他の中国人学生に比べて、「そう思う・どちらかと言えばそう思う」と答える比率が高く、4割程度ある。ここに見る限り、男性では、温州人学生は他のグループより私事化していると言える。これを数量化して階級値を直線上にプロットすると、図7のようになる。

図7と表7から見ると、W1「温州人学生」とW2「浙江省学生」は左にあり、x1「そう思う・どちらかと言えばそう思う」の階級値は-1.13とx2「どちらかと言えばそう思わない」の階級値は-0.41に近い。W1「温州人学生」とW2「浙江省学生」は、その他の中国人学生より、個人の権

表7 「個人の権利のためには、公共の利益が多少損なわれても、仕方がない」(男性)

	そう思う・ どちらかと言えば そう思う x1 -1.13	どちらかと言えば そう思わない x2 -0.41	そう思わない x3 1.38	合計
温州人学生 W1 -1.10	13 40.6%	12 37.5%	7 21.9%	32 100.0%
浙江省学生 W2 -0.57	29 26.1%	55 49.5%	27 24.3%	111 100.0%
浙江省外学生 W3 1.74	5 13.9%	11 30.6%	20 55.6%	36 100.0%
留学生 H2 0.93	6 15.4%	16 41.0%	17 43.6%	39 100.0%
合計	53 24.3%	94 43.1%	71 32.6%	218 100.0%

Sig.=0.003 Chi-square=19.9316

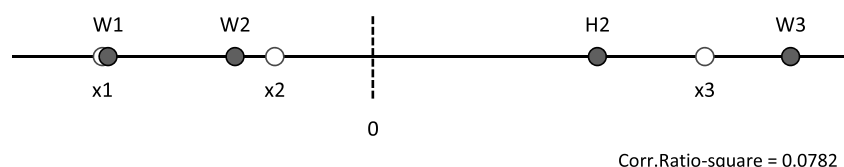


図7 「個人の権利のためには、公共の利益が多少損なわれても、仕方がない」(男性)

利を重視したいと考えていることがわかる。また、W2「浙江省学生」と比べても、W1「温州人学生」は、一層個人の権利を重視する姿勢を示している。

3) 家庭優先

次に、「結婚したら、仕事よりも家庭を優先的に考えたい」という項目とクロス集計と数量化を行った。この項目も、男性においてのみ、温州人学生とその他中国人学生との間に有意差が見られた。クロス表は表8のとおりである。この項目についても4つの選択肢があるが、「そう思わない」と答えた人数は極めて少なく、ここでは「どちらかと言えばそう思わない」と合わせて「そう思わない・どちらかと言えばそう思わない」として分析した。

表8から見ると、どのグループにおいても「そう思う」または「どちらかと言えばそう思う」と答えた学生が7割強に上る。多くの学生が「結婚したら、仕事よりも家庭を優先的に考えたい」と思っており、家庭優先の態度を示していることがわかる。中でも温州人学生は、「そう思う」と答える学生が6割程度あり、仕事より家庭を優先しているという姿勢を強く示している。これを数量化して階級値を直線上にプロットすると、図8のようになる。

図8と表8から見ると、x2とx3に逆転が見られるが、その階級値は極めて近く、ほぼ同値とみなしてよいであろう。こうして見ると、仕事より家庭という志向は、明快に「そう思う」という

表8 「結婚したら、仕事よりも家庭を優先的に考えたい」(男性)

	そう思う x1 -1.46	どちらかと言えば そう思う x2 0.74	そう思わない・ どちらかと言えば そう思わない x3 0.58	合計
温州人学生 W1 -2.27	19 59.4%	8 25.0%	5 15.6%	32 100.0%
浙江省学生 W2 0.50	29 25.9%	54 48.2%	29 25.9%	112 100.0%
浙江省外学生 W3 -0.34	13 36.1%	15 41.7%	8 22.2%	36 100.0%
留学生 H2 0.74	9 23.1%	20 51.3%	10 25.6%	39 100.0%
合計	70 32.0%	97 44.3%	52 23.7%	219 100.0%

Sig.=0.022 Chi-square=14.7357

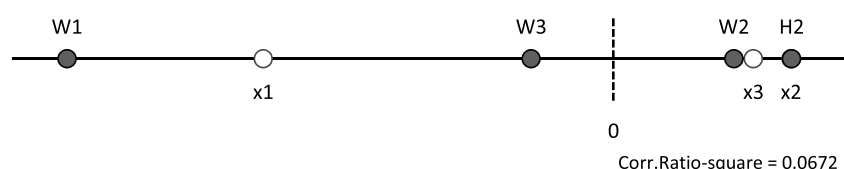


図8 「結婚したら、仕事よりも家庭を優先的に考えたい」(男性)

回答以外は大きく変わらないということになる。図8で、W1「温州人学生」が一番左にあり、他のグループと比べて明快に家庭志向を示す。この結果の背景には、温州の経済の構造や、就労習慣の影響もあるかと思われる。中国人学生の中にこうして群間差が認められたため、日本人学生の特徴としては挙げなかったが、日本人学生もまた高い家庭志向を示している。このことから、温州人が、日本人同様の家庭志向＝私事化傾向を示すと言えよう。しかし、温州では、企業に勤務するものが、同時に家庭で事業を起しているケースも少なくない。そうしたケースを想定するなら、ここで、一社員として会社で働くという「仕事」に対して、家族が経営している自営業も含めて「家庭」としてこの問いを解釈した可能性は否定できない。

V おわりに

以上の分析から見ると、日本人学生の職業観・就職観の特徴として、一つには私事化傾向が指摘できる。日本において、様々な点で私事化傾向が言われるが、大学生の職業観・就職観にもその一端が表れてはいる。

しかし、中国との比較では私事化傾向を指摘できるものの、全体を通して見るなら、言われるほどには私事化していないという点に注目したい。日本人学生でも5割が「個人の権利のためには、

公共の利益が多少損なわれても、仕方がない」に反対しており、成果主義についても、賛成が半数を超えているとは言え、4割が年功序列を支持しているという反応には、彼らの安定志向とともに、公共的なものに対する期待が感じられよう。

それ以外に、日本人学生が示した幾つかの傾向には、日本の雇用形態、就業構造の特徴として挙げられてきた、終身雇用、年功序列といった雇用形態や、安定を志向する文化の影響が見られる。こうした傾向は薄まりつつあるとしても、中国人学生（留学生含む）との比較においては、日本人の特徴として今も残っていることを示している。

温州人学生は、全体では他に比べて理想志向が弱いという点以外に、統計的には有意差を認めることができなかった。男性だけを見ても、個人の権利志向、家庭優先の2点以外に特徴は認められない。温州人気質と言われるものが、少なくとも本調査の対象者においては認められなかったと言ってよいであろう。全体として、温州人の特徴が見られなかったことに関しては、三つの仮説が考えられる。

一つ目は、温州人の気質の変化である。豊かな社会になって、彼らの発展志向が弱まり、ある種のハングリー精神をもとに世界に進出してきた、その特徴が薄まったということが考えられよう。二つ目は、温州人の特徴的な気質を備えている学生は、国内の他の大学や、留学という形で外部に出ていて、温州にあるW大学には少ないという仮説である。「人のいるところ温州人あり」と言われ、今も約42.5万人の温州人が海外（香港、マカオを含む）に進出する¹⁰⁾など、ワールドワイドな活躍を見せるが、温州人気質はそうした国外の温州人にこそ見られるのであり、地元に残る学生には見られないという解釈である。三つ目は、階層面からの解釈である。温州は、かつては経済的に決して豊かな地域ではなかった。その中で、小さな商売を成功させ、伸し上がっていったかつての成功者たちは、学歴より実力、そして要はお金だという哲学をもっており、学歴志向が弱い。温州で成功するこれからの温州人気質の後継者たちは、大学になど行かず、働きながらどこかで起業のチャンスを窺っているのかも知れない。とすれば、大学生を対象に温州人気質の調査をしても、その特徴は表れないということが考えられよう。

温州人の特徴として僅かに認められた点としては、男性における、ある種の私事化傾向が指摘できる。これについては、現在の温州の豊かさが、日本や欧米の考え方に近い新たな温州人を作り出しており、日本の若者の特徴として私事化傾向が挙げられたのと同様に、温州人の特徴として私事化傾向が表れていると解釈することもできる。

しかし、ここで別の解釈の可能性を提示したい。温州の発展のモデルでは、その人間関係が注目された¹¹⁾。彼らは親族等の身近な人々との縁を重視し、親族経営の企業から発展してきたのである。また、海外にいる親族を頼って海外進出を果たし、それを足がかりに大きく発展したケースも少なくない。こうして少し離れた親族からもたらされた情報は、弱い絆の強みを発揮しており、スモールワールド現象の一つとしても注目された^{6), 12)}。また、温州人の企業は家族経営のことも多く、大手企業に勤める社員であっても、副業（の方がはるかに高収入をもたらすこともあるが）として家族経営の企業を営んでいることもある。彼らにとって、家庭とは、家族と営むそうした事業をも含めた存在でもありうる。温州人気質と呼ばれるものが、今回の調査では確認できなかったが、その中であって、彼らの家庭重視の志向には、そうした極めて温州的な背景があるものと解釈

することもできよう。

以上、日本人学生においても温州人学生においても、僅かに私事化傾向を指摘できる他には、彼らを巡る就業環境、職業文化の影響があるものと考えられる。

付記

なお、本研究は、H 大学における 2009 年度社会調査演習 I、II の一環として実施された学生の実生活実態調査に基づくものである。

謝辞

W 大学調査については、温州大学商学院 張一力教授、易曉文副教授、および温州大学商学院の学生に協力を頂いた。調査の全過程に関わった H 大学と W 大学の学生、および調査対象者となった両大学の学生の全てに感謝するとともに、温州調査の実施に当たってご協力を頂いた温州大学商学院の両教授に深謝の意を表するものである。

参考文献

- 1) 中華人民共和国国家統計局, 2009, 中国統計年鑑 2009, 中国統計出版社.
- 2) 太郎丸博, 2009, 若年非正規雇用の社会学 — 階層・ジェンダー・グローバル化, 大阪大学出版会.
- 3) 浙江省統計局, 2008, 浙江省統計年鑑 2008, 中国統計出版社.
- 4) 関満博, 2006, 現代中国の民営中小企業, 新評論, pp308-383.
- 5) 洪振宇, 2008, 温州改革開放 30 年, 浙江人民出版社.
- 6) 西口敏宏・辻田素子・許丹, 2005, 温州の繁栄と『小世界』ネットワーク, 一橋ビジネスレビュー 52(4), 22-38.
- 7) 山田昌弘, 2004, 家族の個人化, 社会学評論 54(4), 341-354.
- 8) 儀田朋子・香月保彦, 2008, 「個人化」「個別化」と「私事化」概念 — 概念の整理と指標化に向けて, 呉大学社会情報学部紀要 社会情報研究 14, 69-74.
- 9) 嚴善平, 2004, 温州モデルと蘇南モデル, 三田学会雑誌 96(4), 487-502.
- 10) 温州市人民政府外事弁公室・温州市人民政府港澳台弁公室公式ホームページ,
<http://www.wzfao.gov.cn/>.
- 11) 渡辺幸男, 2004, 温州の産業発展試論 — 自立・国内完結型・国内市場向け産業発展, その意味と展望, 三田学会雑誌 96(4), 503-520.
- 12) Mark S. Granovetter, 1973, The Strength of Weak Ties, American Journal of Sociology 78(6), pp1360-1380. = マーク・S・グラノヴェッター (大岡栄美訳) 野沢慎司編・監訳, 2006, リーディングス ネットワーク論 — 家族・コミュニティ・社会関係資本, 勁草書房, pp123-158.

付録 A クロス表に基づく数量化

本文中に用いたクロス表の階級値は、以下のような手順で求めた。

出発点として、それぞれ c 項目、 r 項目からなる変数 x, y のクロス表 (表 A) を考える。この変数 x, y の各項目に数量 $x_1, x_2, \dots, x_c; y_1, y_2, \dots, y_r$ を付与し、相関係数または相関比が最大となるように、これらの数量を定めることとする。

表 A クロス表 ($y \times x$)

$y \backslash x$	x_1	x_2	\dots	x_j	\dots	x_c	合計
y_1	n_{11}	n_{12}	\dots	n_{1j}	\dots	n_{1c}	$n_{1\cdot}$
y_2	n_{21}	n_{22}	\dots	n_{2j}	\dots	n_{2c}	$n_{2\cdot}$
\vdots	\vdots	\vdots	\ddots	\vdots	\ddots	\vdots	\vdots
y_i	n_{i1}	n_{i2}	\dots	n_{ij}	\dots	n_{ic}	$n_{i\cdot}$
\vdots	\vdots	\vdots	\ddots	\vdots	\ddots	\vdots	\vdots
y_r	n_{r1}	n_{r2}	\dots	n_{rj}	\dots	n_{rc}	$n_{r\cdot}$
合計	$n_{\cdot 1}$	$n_{\cdot 2}$	\dots	$n_{\cdot j}$	\dots	$n_{\cdot c}$	n

クロス表 (表 A) の各セルの度数 n_{ij} を (i, j) 成分とする r 行 c 列行列を \mathbf{N}_{yx} 、変数 x, y の周辺度数 $n_{\cdot j}, n_{i\cdot}$ を対角成分とする対角行列をそれぞれ $\mathbf{N}_x, \mathbf{N}_y$ 、変数 x, y の項目に付与された数量 x_j, y_i を成分とする列ベクトルをそれぞれ \mathbf{x}, \mathbf{y} とすると、変数 x, y の全平均 \bar{x}, \bar{y} 、全分散 σ_x^2, σ_y^2 は、

$$\begin{aligned}\bar{x} &= \frac{1}{n} \mathbf{1}_c^T \mathbf{N}_x \mathbf{x} & \sigma_x^2 &= \frac{1}{n} \mathbf{x}^T \mathbf{N}_x \mathbf{x} \\ \bar{y} &= \frac{1}{n} \mathbf{1}_r^T \mathbf{N}_y \mathbf{y} & \sigma_y^2 &= \frac{1}{n} \mathbf{y}^T \mathbf{N}_y \mathbf{y}\end{aligned}$$

と表される。ここで、ベクトル $\mathbf{1}_c$ は、成分が全て 1 の c 次元列ベクトルである。また、変数 x, y の共分散 γ_{yx} 、変数 y を外的基準と見做したときの群間分散 $\sigma_{(b)}^2$ は、それぞれ

$$\begin{aligned}\gamma_{yx} &= \frac{1}{n} \mathbf{y}^T \mathbf{N}_{yx} \mathbf{x} \\ \sigma_{(b)}^2 &= \frac{1}{n} \mathbf{x}^T \mathbf{N}_{yx}^T \mathbf{N}_y^{-1} \mathbf{N}_{yx} \mathbf{x}\end{aligned}$$

と表される。

A.1 相関係数の最大化

相関係数 ρ_{yx} の最大化を $\bar{x} = 0$, $\bar{y} = 0$, $\sigma_x^2 = 1$, $\sigma_y^2 = 1$ 規格条件下で図るために、 $\lambda_{\bar{x}}, \lambda_{\bar{y}}, \lambda_{\sigma_x^2}, \lambda_{\sigma_y^2}$ の 4 組をラグランジュの未定乗数として、階級値ベクトル \mathbf{x} , \mathbf{y} と未定乗数の関数

$$L_1(\mathbf{x}, \mathbf{y}, \lambda_{\bar{x}}, \lambda_{\bar{y}}, \lambda_{\sigma_x^2}, \lambda_{\sigma_y^2}) = \gamma_{yx} - \lambda_{\bar{x}}\bar{x} - \lambda_{\bar{y}}\bar{y} - \frac{1}{2}\lambda_{\sigma_x^2}(\sigma_x^2 - 1) - \frac{1}{2}\lambda_{\sigma_y^2}(\sigma_y^2 - 1)$$

を考える。 L_1 の最大値を求めるために、ここで $\frac{\partial L_1}{\partial \mathbf{x}} = 0$, $\frac{\partial L_1}{\partial \mathbf{y}} = 0$ とおけば、固有方程式

$$\begin{aligned} \mathbf{N}_x^{-1}\mathbf{N}_{yx}^T\mathbf{N}_y^{-1}\mathbf{N}_{yx}\mathbf{x} &= \lambda_{\sigma_x^2}\lambda_{\sigma_y^2}\mathbf{x} \\ \mathbf{N}_y^{-1}\mathbf{N}_{yx}\mathbf{N}_x^{-1}\mathbf{N}_{yx}^T\mathbf{y} &= \lambda_{\sigma_x^2}\lambda_{\sigma_y^2}\mathbf{y} \end{aligned}$$

を得る。ここで、固有値 $\lambda_{\sigma_x^2}\lambda_{\sigma_y^2}$ が最大化された相関係数の 2 乗 ρ_{yx}^2 であり、固有ベクトル \mathbf{x}, \mathbf{y} がそれを与える階級値 x, y である。

A.2 相関比の最大化

相関比の 2 乗 η^2 の最大化を $\bar{x} = 0$, $\sigma_x^2 = 1$ の規格条件下で図るために、 $\lambda_{\bar{x}}, \lambda_{\sigma_x^2}$ の 2 組をラグランジュの未定乗数として、階級値ベクトル \mathbf{x} と未定乗数の関数

$$L_2(\mathbf{x}, \lambda_{\bar{x}}, \lambda_{\sigma_x^2}) = \frac{1}{2}\sigma_{(b)}^2 - \lambda_{\bar{x}}\bar{x} - \frac{1}{2}\lambda_{\sigma_x^2}(\sigma_x^2 - 1)$$

を考える。 L_2 の最大値を求めるために、ここで $\frac{\partial L_2}{\partial \mathbf{x}} = 0$ とおけば、固有方程式

$$\mathbf{N}_x^{-1}\mathbf{N}_{yx}^T\mathbf{N}_y^{-1}\mathbf{N}_{yx}\mathbf{x} = \lambda_{\sigma_x^2}\mathbf{x}$$

を得る。ここで、固有ベクトル \mathbf{x} が階級値 x を、固有値 $\lambda_{\sigma_x^2}$ が最大化された相関比の 2 乗 η^2 を与える。結果として、相関係数と相関比は同じ固有方程式を得る。

また、階級値ベクトル \mathbf{x} を得ることで、それぞれの群内平均

$$\bar{\mathbf{y}}_t = \mathbf{N}_y^{-1}\mathbf{N}_{yx}\mathbf{x}$$

を求めることも可能である。